

花き栽培講習会（小ギクの定植・エスレル散布、アスター等の定植等）

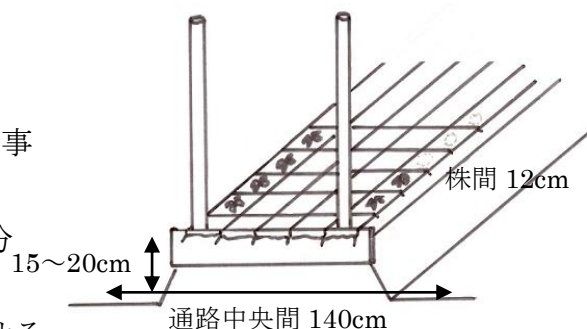
令和2年4月

【小ギク】

1 定植

（定植は、挿し芽後3週間を目安に行う）

- ・フラワーネットの目に合わせて、2条植えとなるよう事前にマルチに直径5cm程度の穴を開ける。
- ・定植作業前にプラグトレーにかん水し、定植苗に十分水を吸わせて定植後の苗のしおれを防ぐ。
- ・定植後、株元にたっぷりかん水し、土と根を密着させる。
- ・必要に応じて、定植後にハモグリバエ類、ネキリムシ対策としてオルトラン粒剤（6kg/10a）を施用する。

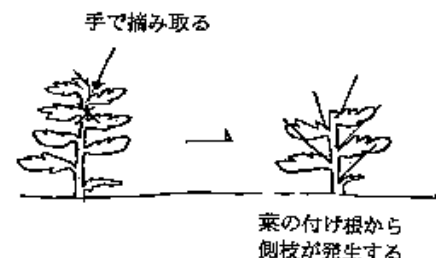


定植のポイント

- ・挿し芽後10日前後で発根が始まり、20日前後で定植可能な苗になる。（根鉢が形成されると苗の老化が始まるので、育苗期間は3週間以内を目安とする。）
- ・根がまわった苗は、活着を促進するため根鉢の下3分の1程度をむしって定植する。
- ・根がまわった老化苗は生育揃いが悪く、早期に開花する。
- ・苗の大きさ、太さを揃えて植えるとその後の生育が揃う。
- ・苗は徒長して長くても深植えしない。

2 摘心

- ・摘心は、草丈確保と開花調節のため計画した日に展開葉5枚程度残し、先端部分を折り取れる位置で摘む。ゴールデンウィーク後に定植する場合は、摘心して定植する。
- ・摘心後にダントツ粒剤（1g/株）を施用し、アブラムシ等の発生を予防する。
- ・摘心が浅すぎて側枝が発生していない株は速やかに再度摘心する。



摘心のポイント

- ・摘心位置（地際からの高さ）を揃えると、その後の管理がしやすくなる。
- ・側枝が出にくい品種は、摘心の位置を高めに行い、整枝時に下から出る側枝を残すようにする。

3 エスレル処理

- ・自然開花が早い品種では、花芽分化を抑えて開花を遅らせるために、「エスレル10」の500倍液を散布する（展着剤は入れない）。
- ・散布回数は品種に応じて0～2回散布とする。ただし、散布は対象とする品種の半分のみとし、残り半分は散布しない。

散布例	2回散布【 <u>やよい(赤)</u> 、 <u>かがやき(黄)</u> 、くろひめ(赤)、あけみ(黄)】
	→ 1回目 5/10～5/15、2回目 5/20～5/25
	1回散布【 <u>いずみ(白)</u> 、はじめ(白)、 <u>かずみ(赤)</u> 】
	→ 1回目 5/20～5/25
	散布しない【あきよ(赤)、あみ(赤)、 <u>涼(白)</u> 、まちこ(赤)】

- ・ ハンドスプレーや噴霧器で、株全体が濡れる程度まで散布する。
- ・ ほ場が乾いた晴天日の昼間に散布すると効果が高い。散布時期を守るとともに、散布は5月25日頃までには終える。
- ・ 散布ムラや隣の品種への飛散に注意する。

4 病害虫防除

(1) 定期防除 (病害虫が発生していないとき週1回程度の定期防除を実施する)

- ・ **殺菌剤**：白さび病等の予防剤 (ジマンダイセンフロアブル、ダコニール1000等) を中心に散布する。白さび病が発生した場合 (※) または降雨が続き発病が懸念される場合は、治療剤 (ラリー乳剤、アミスター20フロアブル) に切り替える。
※白さび病が発生した品種は、防除を徹底する。発病適温 17℃、雨とともに感染拡大する。
- ・ **殺虫剤**：薬剤抵抗性の出現を防ぐために、系統の異なる薬剤 (ダントツ水溶剤、オルトラン水和剤等) をローテーションで散布する。

(2) 特に必要な防除

- ①入梅期からの予防 (6月10日頃)
 - ・ 白さび病：ラリー乳剤等
- ②ハダニ類など
 - ・ 整枝後にバロックフロアブル、ダニサラバフロアブル等 (浸透移行性ないので葉裏に直接噴霧する)
 - ・ 6月2週目にポリオキシシンAL水和剤「科研」(浸透移行性あり)
 - ・ 6月4週目に inochio セイレーンフロアブル (浸透移行性あり)
- ②梅雨明け後の予防 (7月上～中旬)
 - ・ 白さび病 → ラリー乳剤等
 - ・ オオタバコガ、ヨトウムシ等 → アファーム乳剤

(3) 農薬散布の注意点

- ・ 散布は朝夕の涼しい時間帯に行う。
- ・ 薬剤は葉の裏側にもかかるよう、下から吹き上げるように、万遍なく散布する。
- ・ 農薬のラベルに記載されている内容をよく確認して、登録のある薬剤を散布する。(ハダニは薬剤抵抗性がつきやすく、使用回数が各1～2回なので注意する。)
- ・ 農薬散布量の目安 (1a (1,200本) 当り)

草丈	10～20 cm	25～50 cm	55～100 cm
散布量	10 <small>リットル</small>	30 <small>リットル</small>	40 <small>リットル</small>

・参考

小ギクに発生する病害虫の発消長

	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
マメハモグリバエ				■								
アブラムシ				■								
ハダニ						■						
アザミウマ				■			■					
ヤガ類						■						
白サビ病			■			■		■				
黒斑病								■				

5 整枝

- ・草丈（側枝）が 20～30cm になったら、①最も長く太い側枝を取り除き（下図・中）、②その後、短く細い側枝を取り除いて、③生育中庸な側枝を残し 3～4 本仕立て（下図・左）にする。地際から出ている枝は折り取る（下図・右）。
- ・揃える枝は地際から近いもので揃える。
- ・1～2週間後に再度確認し、遅れ芽等を取り除く。
- ・整枝で取り除いた側枝、かき取った葉は、ハダニ類や白さび病が付いている恐れがあるので、必ずほ場外で処分する。
- ・定植後から梅雨入りまでは、降水量が少なくほ場が乾燥すると側枝の伸長が抑えられるので、随時かん水する。



【アスター】

- ・発芽後は明るい場所で管理し、乾いてきたらかん水する。
- ・セルトレイ内で根が回る前に定植する（目安：は種から3週間後、本葉3～4枚（4月20は種で5月11日））。
- ・定植後は活着するまで乾かないようにかん水する。活着後も過湿・過乾燥に注意する。
- ・近くの大きい雑草は引き抜かない（根を傷めるため、ハサミで切る）。
- ・ほ場に水が停滞すると萎ちょう病や立枯病が発生するので、排水対策を徹底するとともに罹病株は速やか抜き取りにほ場外で処分する。

【ケイトウ】

- ・セルトレイ内で根が回る前に定植する（目安：は種から3週間後、本葉3～4枚（4月20は種で5月11日））
- ・定植後、低温に遭遇すると早期開花につながる。遅霜の心配が少なくなる5月中旬以降に定植する。直根性なので、根を傷つけないように注意し、深植えにしない。
- ・花穂を小さく、茎を細くつくるため基肥に窒素肥料を施用しないで追肥で調節する。
- ・除草剤には弱いので、雑草は手で取る。

【シンテツポウユリ】

- ・定植後はたっぷりとかん水するとともに、活着するまで土壌を乾燥させないよう、こまめにかん水する。抽台するまでは、乾燥に注意し、晴天が続けばかん水する。
- ・活着後を目安に1週間毎に3回程度、液肥を施用する。その後、生育期を通じて葉色が薄くなってきたら、液肥を施用する。
- 例) 液肥 … 野菜の達人またはやさい燐加安 S540 の 500 倍液を株元かん注
- ・6月上旬頃、葉色が薄いようなら、I B化成 S 1 号を株元に2粒置く。
- ・定期的に防除する。

葉枯病：(湿潤・過湿条件下で多発)

生育期～収穫期に、ダコニール 1000 (1,000 倍)、アフェットフロアブル (2,000 倍)、フルピカフロアブル (2,000～3,000 倍) 等を、概ね 10 日毎に交互に散布する。

アブラムシ：

トレボン乳剤 (2,000 倍)、オルトラン水和剤 (1,000～1,500 倍) など

【共通事項：フラワーネットの引き上げ】

- ・茎の曲がり防止するため、生育にあわせて、草丈の半分～2/3 程度まで小まめにフラワーネットを引き上げる。